



★第9号★  
2015.11.20(金)  
浦添高校\*保健室\*



## AIDS IS NOT OVER ~まだ終わっていない~

治療法の進歩により、エイズの原因ウイルスである HIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染した HIV 陽性者が長く生きていくことが期待できるようになりました。これは、社会的に既に多くの HIV 陽性者が働き、学び、生活していることを示しています。

職場や学校、医療機関など生活の様々な場所で HIV/エイズに対する差別・偏見の解消等を図り、HIV 陽性者が社会で安心して生活できるよう、環境を整えることが一層重要となっています。

2013 年 1 年間における新規 HIV 感染者報告数は 1,106 件（過去 2 位）、感染に気づかずにエイズを発症して報告された新規エイズ患者報告数は 484 件（過去最多）でした。合計は 1,590 件（過去最多）で、全体に占める新規 AIDS 患者の割合が 3 割を超える状況が続いています。

新規 HIV 感染者および新規エイズ患者の累計報告数は 23,000 件を超えるとともに、最近では地域的、年齢的にも広がりを見せ、

### なぜ、エイズを学ぶ必要があるのか・・・

#### 1. エイズに対する正しい知識と理解を身に付け、エイズを予防する。蔓延を防ぐ

HIV 感染、エイズは予防できる病気にもかかわらず、世界や日本では感染者が増加しています。

誰でも、ガンや生活習慣病など病気には罹りたくないものです。エイズでもそうです。ガンや生活習慣病は予防のためにいろいろ気をつけていても遺伝や加齢、環境などによって罹患したりします。完全に予防することが難しい病気です。でも、エイズは正しい知識と行動で高い確率で防ぐことのできる病気です。

エイズは薬の進歩で発病までの期間を延ばすことができるようになりましたが、完全に治す薬はまだ開発されていません。他の病気と同様に、早期発見・早期治療が大切です。また、自分が感染しているかどうかを知ることによって、他の人にエイズが感染しないようにすることも非常に大切なことです。

感染経路を知り、正しい行動することで確実に予防することが可能です。

#### 2. エイズに対する不安や偏見を払拭する

HIV に感染した人やその家族が誤解や偏見による差別を受けているという残念な事実があります。エイズという言葉がからかいやいじめに使われることもありました。

病気に「良い」「悪い」はありません。誰でも感染する可能性はあります。不幸にして HIV 感染、エイズに罹ってしまった人を差別することは間違った態度です。

今、多くの HIV 感染者、エイズ患者を支援し、心の支えになっています。HIV 感染者も予防の大切さを訴えています。これからも、エイズについての正しい知識を持って、誤解や偏見をなくしていきましょう。



### 限られた感染経路 エイズはこうしてうつります。

#### 感染経路 1： 性行為による感染

性行為による感染はもっとも多い感染経路です。HIV は主に血液や精液、膣分泌液に多く含まれています。HIV は感染者の血液・精液・膣分泌液から、その性行為の相手の性器や肛門、口などの粘膜や傷口を通過してうつります。ですから、**性行為におけるコンドームの正しい使用や、不特定多数との性行為など無防備な性行為を避けることはエイズや他の性感染症予防にとって有効な手段です。**



#### 感染経路 2： 血液を介しての感染

HIV が存在する血液の輸血や、覚せい剤などの依存性薬物の“回しうち”による注射器具の共用などによって感染します。日本では、現在、献血された血液は厳重な検査により最高水準の安全が確保されていますが、現在の技術ではきわめて稀とはいえ、感染の可能性を完全には排除できません。なお、血液凝固因子製剤については加熱処理が行われているので、現在の血液製剤で感染する心配はありません。

#### 感染経路 3： 母親から赤ちゃんへ母子感染

母親が HIV に感染している場合、妊娠中や出産時に赤ちゃんに感染することがあります。母乳による感染の例もあります。日本では、お母さんが HIV の治療薬を飲むことや母乳を与えないことで、赤ちゃんへの感染を 1% 以下におさえることができます。



### 正しい知識と理解が大切

「HIV にかかりやすいのはどんな人？」というのは、この病気についてのよくある疑問のひとつです。その答えは HIV に感染しやすい“人間の行為”があるということです。日本では感染経路のほとんどが性行為です。感染しやすい行為をすれば、だれでもうつる可能性があり、他人ごとではない「自分の問題」と考えることが大切です。

HIV は、3 つの感染経路でしかうつりません。ふだんの生活ではうつらないことがわかっており、むやみに怖がることはありません。この病気を予防し、あるいは共に生きるために、まずきちんとした知識や理解をもつことが大切です。